## 江戸時代の環濠集落が残る　　2007.11.8

# 日本一の街並「今井町」を歩く

　奈良県橿原市の今井町は、平成 19 年に民放で放送された「街並コンテスト」で一位に輝きました。東西 600m、南北 300m の街全体が平成 5 年に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されました。そこに住む人にとってはかなり不便でしょうが、それにもめげずに街並を残すために努力しています。その今井町を、友夫婦と一緒に 11 月 8 日散策してきました。

## 大和八木駅から歩いて 10 分

　名古屋駅 7.50 分の近鉄特急に乗り、9.48 分大和八木駅に到着。ここから橿原線に乗り換えて 1 分の、次の八木西口で降りると最も近い。
しかし、すぐに来た電車は急行だったのでここで降りて 10 分ほど歩いた。

今井町の全体図

時間も時間になって、いつものようにコーヒーが飲みたくなり、自販機を探しながら歩いたのだが、道路の反対側には時々あっても歩く側になかなかない。やっと見つけて自販機の前に立つと、嬉しいことに100円と表示されている。20円儲かった気分で、ボスを飲みながら歩くとやはり旨い。そして、八木西口駅を右手に見ながら橿原線の踏切を越えると、案内看板があり今井町の生い立ちや街並の全体図、主な建物の説明があった。

## 大和の金は今井に七分といわれるほど栄えた

今井町の成立は、戦国の世、天文年間(1532～1555)に一向宗の門徒が御坊(称念寺)を開き、自衛上武力を養い、濠をめぐらし都市計画を実施したことに始まる。永禄11年(1568)織田信長が足利義昭を擁して入京以来、本願寺も反信長の旗を建て、寺を中心とした城塞都市の形態を整え、抵抗したが天正3年(1575)今井氏は明智光秀を通じて降伏し、事なきを得た。かくして大阪や堺などとも交流が盛んになり、商業都市として変貌を遂げ、江戸時代には南大和最大の都市となって大いに栄えた。また、堺とならび自治的特権が認められ、惣年寄.町年寄をおき町政にあたった。これは江戸、大阪、京都、奈良と同じ扱いである。

今井町の町並みは東西600m、南北300m、周囲に環濠土居を築いた城砦都市で、内部の道路も、見通しのきくものはなく、ほとんどが一度屈折させてある。これは軍事目的で造られたが、江戸中期には今井商人の生命、財産を守るためのものに変貌した。周りを二重三重の濠で囲まれた、この環濠集落は今でも大半が伝統的な町屋で、今西家をはじめとする9軒が国の重要文化財に、3軒が県の指定文化財、6軒が市の文化財に指定されています。
これほどまとまった規模の集落は全国でも珍しく、歴史の重みをずっしりと感じさせてくれます。

## 自治都市「今井」と商業都市「今井」

江戸時代の今井は、幕藩体制下で約 180 年間天領でした。しかしながら、自治の気風は強く、大幅な自治的特権が許されていました。町政は今西.尾崎.植田氏の惣年寄(この下に 6 人の町年寄が居て、更にその下に町代がいた)を中心に組織され、司法.警察権の一部を握っていました。
また、町民自らが「町掟」を定めて社会のルールを作っていました。

そして、近在から多くの商人が移り住み、あらゆる商売が行われ、中でも操綿.古手.木綿を中心に栄えました。その中から財力を蓄えた者もでて、両替商を営み大名にも金銀を貸す者も現われました。寛永 11 年(1634)には「今井札」の発行が幕府から許可されたほどです。このようにして最盛期には「大和の金は今井に七分」とまでいわれたのです。こうして江戸時代初めには、家数千軒、人口 4.000 人に達するほどの都市として繁栄をみたのです。

## どこを歩いても同じような家並み

八木西口駅からなら 3 分ほどの所に今井の集落はある、でもこちらは裏口だったので案内のパンフレットもなく散策のコースが分からなかった。

こんな路地ばかりです

そこで友が持ってきた大まかな地図を見ながら、南都銀行の横道から集落の中へ入った。この銀行も下は黒色上は白い漆喰で造られて、周りの町屋に溶け込んでいる。見渡せばそこには同じような造りの家が並び、白と黒の美しい家並みが続いていた。 道幅は大通りで一間くらい、路地は三尺くらいだがいずれもアスファルトではなく細かな砂利で固められていてとても歩きやすく、見た目にも落ち着いた雰囲気だ。一部では電線の地中化も進められているようであった。

今井町の伝統的様式の町屋は、切妻造り、平入、前後疵付本瓦葺というのが基本。内部は片側を通り土間としているのが特徴で、大きな建物なのに間取りは4畳半が基本で、前後に三部屋が並んでいます。したがって、今流の8畳とか10畳の部屋はなく大富豪の屋敷とて皆同じであったことに驚かされた。反面これは建築上からすると今で言う規格化を進めた「標準化」がなされていた事になる。この町家の造りは厳しい規則があったといいます、その中で個性的なデザインを生み出し屋根の煙だし、鬼瓦、二階のむしこ窓、壁面の意匠にその特徴が見られます。

## 間取りから生まれた言葉「敷居が高い」

商家は4畳半の部屋が三部屋並び手前の部屋は、みせ.なかのま.だいどころ、奥の部屋はみせおく.なんど.ぶつまと呼ばれる。「なんど」は「納戸」と書いて物置を意味しそうですが、今井町では主人の部屋になります。そして、なかの間からなんどへ入る所の敷居は高さが20cmほどあります。この敷居は主人の許可なくだれもまたぐことはできなかったのです。
これが「敷居が高い」の語源になったのです、そして、敷居が高い理由を聞いてびっくりしました。それは寝る時に板の間に「わら」を敷いていたので、なんどからわらが飛び散らないようにするためだったのです。とても単純なことが理由で、主を敬う言葉として定着したことが分かりました。

また、隠居部屋はなんと土蔵の入り口の前にありました。部屋の戸を開けるとそこが蔵の入り口になっているのです。蔵はその家の一番大事なものを入れた土蔵なので、その門番をかねていたのです。そのため「蔵前座敷」と呼ばれました。

## お城のような重文「今西家住宅」

集落の西の外れにあるのが代表的な建物「今西家住宅」です。今西家は代々今井の惣年寄の筆頭を務めていた家です。惣年寄とは、江戸時代の村の庄屋にあたりますが、町内の警察権や裁判権も持っていた権力者なのです。
建物は慶安 3 年(1650)に建てられた民家で、お濠に面して建ちお城を思わせるような構造で「八つ棟造り」と呼ばれている豪壮な建物です。外壁を白漆喰塗りごめとし大棟の両端に段違いに小棟をつけ、入母屋造りの破風を前後食い違いに見せ、本瓦で葺いた堂々とした城郭風の外観をもっています。このお濠も一部では三重にもなっていました。

お堀から見た今西家と土間から見た内部

他の商家とは違い丈も高く梁や桁も太い大きな木材が使われています。また、縁は高く作られ、裁判をする時のお白州としても使われるようになっています。したがって、牢屋もあったのです。
昭和 32 年に重文に指定された今西家住宅は、いつも見学できるのではなく、春は 4 月 15 日～ひと月と、秋は 10 月 15 日～ひと月に限られています。

## 町造りの元になった称念寺

お寺の前まできたら、観光ガイドの方がいて説明をしてくれた。ガイドの尾島さんの話で二つのことが分かった。
建物は江戸時代初期に再建されたもので、本堂も庫裏も築 400 年。大規模な浄土真宗本堂は重文に指定されている。また、紀州徳川家とは親戚関係にあり、屋根瓦には葵のご紋がついている。そして、このお寺には明治 10 年明治天皇が泊まられたということで、「明治天皇駐蹕御跡」の石碑が建っています。　このお寺は今西家の檀家寺であり、今井町はこの寺の門前町として発展してきたのです。

重文「称念寺の本堂」築 400 年

説明してくれた尾島さん

## 防災体制もしっかり、でもお店がない

町内には要所要所に生活広場という施設がある、何かと思い立ち寄ると、休憩の出来るベンチと小さな庭が作られている。これらも周りと同じような造りで違和感がない。そして、トイレも設置されていて観光客が利用できるようになっている。が、何よりもここは防火用の器具が置かれて、地下は防火用水のタンクになっていたのだ。
火事に備えて必要な水と器具をさりげなく、それでいてぬかりなく準備しているのに感心した。しかし、それに反して観光客用のお店がなかったのが極めて大きな特徴だと思った。

すばらしい街並

正直これだけの町をじっくり観て回るとけっこう疲れる、そこで、ちょっと一休みできる喫茶店などあっても良いと思う。それに、ここを訪れた記念にお土産の一つも買って帰る人も少なくないはず。集落の中ではいけないなら集落の周りにそんなお店があっても良い。地元にお金が落ちる工夫をして、それがお客にも歓迎されることがよりベターと思う。

　そんなことを強く感じた理由の一つに、昼食にしようと食事どころを探すも近くには一軒も見当たらないのだ。少し離れた国道まで行ったら寿司&和食の店が一軒見つかりヤレヤレと安堵した。

## 神武天皇を祀る橿原神宮へ

　食事のあと 2km 程離れた橿原神宮まで歩き、お参りをすることにした。国道を越えると、そこからは大きな木がうっそうと茂る森が続いている。
大きな都市でこれだけの森があるのは日本では珍しい、神宮の手前には神武天皇陵がある。ここに神武天皇のお墓があった所として、天皇陵が造られているが、歴史に詳しい友の解説によるとこうだ。古い歴史をひも解き史実を調べる時、歴史学者と考古学者の意見が食い違っているというのだ。
当時は文字がないので国内では調べられる範囲が限定されてしまう、これに対して考古学者は発掘土器を中国のものと比較しながら、かなり正確に判定ができるという。しかし、偉い学者先生が、ここがそうだと言ったことがそのままになっているとか。

橿原神宮はこの神武天皇と皇后を祀る神社である、そんな話をしながらついでに天皇陵にもお参りをして、橿原神宮へ行くと季節がら菊の花がたくさん並び展示されていた。大きな一輪だけのものやたくさんの花がついたものなど、どれも美しく丹精込めて作られたものばかりだった。広い境内と畝傍山の麓に建つ立派な本殿が神々しく見えた。ここでも家族の健康と息子の良縁を願い手を合わせた。

神武天皇陵

橿原神宮にて

この後喫茶店でコーヒータイムにして休憩し、大和八木駅 15.01”の特急で帰りました。歩数計は久しぶりに 15.100 歩でした。